動詞接頭辞durch- の意味機能

大　野　克　彦

(2007年10月23日　受理)

Semantic Function of Verbal Prefix *durch-*

OONO Katsuhiko

キーワード：分離・非分離前綴り，前置詞，副詞，トラジェクター，ランドマーク

1．はじめに

ドイツ語の動詞接頭辞の中で durch-, hinter-, über-, um-, unter-, wider-, wieder-は，分離前綴りとしても非分離前綴りとしても機能する。auf-, nach-, vor-などの接頭辞を持つ複合動詞は主文中で基礎動詞から常に分離し，非分離用法は認められない。反対にbe-, er-, ver- などの動詞接頭辞は非自立語で強勢を持たず，常に基礎動詞と固く結合し非分離動詞を形成する。上述の７個の動詞接頭辞を持つ複合動詞は，したがって，非分離動詞と分離動詞の中間に位置づけられ極めて特異な存在といえる。本稿では，この分離・非分離前綴りの一つであるdurch- を取り上げ，前置詞や副詞として働くdurchが，分離用法・非分離用法とどのように連関しているのかを意味論的に考察する。

2．意味による基準

G. Helbig / J. Buscha (2001) は『現代ドイツ文法』の中で，分離・非分離両用の前綴りを持つ複合動詞は，動詞の意味によって分離か非分離かが決まるとしている。

1a, Bei der Wanderung habe ich mir die Schuhe durchgelaufen.
　　ハイキングの時，私は靴をはきつぶした。
1b, Der Schüler hat alle Klassen mit Erfolg durchlaufen.
　　この生徒はどの学年も良い成績で修了した。

(238ページ)

1aでは実際に「歩く」行為が認められるため接頭辞durch- は分離し，1bは実際に「歩く」行為を表してはいないので非分離である。分離・非分離の判断基準として，具体的・原義的な意味内容を持っていれば分離し，抽象的・転義的な意味内容であれば分離しないというのが一般的な見解である（橋本1961，Curme1952)。しかしながら実際には，このような判断基準に合致しないケースも見られる。

2a, Er bohrte die Wand durch.
　　彼は壁に穴をあけた。
2b, Er durchbohrte die Wand.
　　彼は壁に穴をあけた。
2c, *Ihr Blick bohrte ihn durch.
2d, Ihr Blick durchbohrte ihn.
　　彼女は刺すような眼差しで彼を見つめた。

2a，2bは「壁に穴をあける」という具体的・原義的な出来事である。一方2dは，実際に彼のからだに穴をあけるわけではないので抽象的・比喩的な表現である。2cでわかるように，確かに後者の意味では分離動詞を用いることができない。しかし，具体的事象は非分離動詞でも表現可能である(2b)。

3a, Die Mutter kämmt das Haar durch.
　　お母さんは髪をくしでよくとかす。
3b, Die Polizei hat das gesamte Gelände ergebnislos durchgekämmt.
　　警察はその地域一体をくまなく捜索したが，何の成果もなかった。
3c, Die Polizei hat das Waldstück mehrmals durchkämmt.
　　警察はその小さな森を何度もくまなく捜索した。

3a-3cの基礎動詞kämmenは「くしでとかす・くしで取り除く」という意味の他動詞であるが，接頭辞durch- を伴う分離動詞，非分離動詞はともに「念入りに捜索する」という意味になる。kammen自体にはこの語義はない。いずれにせよ，durch- による複合動詞化で隠喩（メタファー）が生じていることがわかる。分離動詞である3aが基礎動詞の語義を継承しているが，隠喩により拡張された意味も持ち合わせている。durchbohrenのように非分離用法が具体的・原義的意味を表すこともあれば，durchkämmenのように分離用法でも抽象的・転義的意味を表すということもある。このように，意味という観点から分離・非分離の別を規定するのは妥当ではないといえるだろう。

３．品詞による基準

分離か非分離かを判断するもう一つの基準として，動詞接頭辞の品詞性がある。分離動詞の接頭辞durch- は副詞に，非分離動詞の接頭辞durch-は前置詞に由来するとされている。通常，前置詞には強勢が置かれないが副詞には強勢が置かれるので，この相違が分離動詞・非分離動詞のアクセント位置のずれを映し出している。また副詞は自立語として機能するが故に，基礎動詞と複合しても自立語の特性を保ち続ける。そのため分離動詞のzu不定詞句構造では，zuが分離接頭辞と基礎動詞の間に挿入される。

分離動詞の中には自動詞と他動詞の用法が併存しているものがあるが，非分離動詞は基礎動詞が自動詞であってもすべて他動詞になる。この言語事実の説明として橋本（1975）は，複合動詞の４格目的語が前綴りの補足語であると考えられる場合，つまり前置詞的に用いられる場合は非分離であるとしている。

4a, Der gellende Ruf durchfährt meine Glieder.
　　鋭い叫びが私の五体を電光のように通過する。
4b, ＝Der gellende Ruf fährt durch meine Glieder.
(323ページ)

4aは非分離動詞文であるが，この非分離前綴りdurch- を前置詞句でパラフレーズした4bは可能である。非分離動詞が他動詞であるのは， durchが４格名詞句を支配する前置詞でありこのdurchが非分離前綴りとして基礎動詞と複合したからである，という解釈である。

一方，分離動詞の場合，

5a, Der Vater hilft dem Sohn finanziell.
　　父は息子を経済的に援助している。
5b, Er hat seinem arbeitslosen Freund durchgeholfen.
　　彼は失業している友人を苦境から救い出した。

分離接頭辞durch- を副詞とみなすと副詞には格支配能力がないため，基礎動詞helfenの与格支配能力がそのまま分離動詞durchhelfen「助けて通り抜けさせる」へと継承されると考えられる。では，次の例文を見てみよう。

6a, Er arbeitet fleißig/an einem Roman/über Kafka.
　　彼は熱心に勉強する/長編小説を執筆している/カフカについて研究している。

6b, Er arbeitet ein Buch durch.
彼は本を読み込む。

6aのarbeiten「働く」は自動詞である。前置詞格目的語はとるが前置詞を伴わず直接的に目的語を支配することはない。ところが6bの分離動詞durcharbeiten「十分に研究する」は他動詞用法が存在する。分離前綴りdurch- が副詞とするとこの対格目的語はどこから来たのか，という疑問が生じる。ただこの場合，何をもって副詞とみなすのかが問題になる。仮に，たとえばmeiner Meinung nach「私の考えでは」のnachのように，前に名詞句を伴う後置用法も前置詞のカテゴリーに含めるとすれば，6bが対格目的語をとる理由が4bと同様に説明可能となるからである。このように考えると，品詞に基づく分離動詞・非分離動詞の規定の方が，曖昧さが顕著な具体的か抽象的かという基準よりも有効であるように思われる。

以下では，前置詞durchと副詞durchという観点から，分離・非分離現象を分析していく。

4．durch の語義

4．1　前置詞durch

前置詞“Präposition”はラテン語起源の術語であり，「前に配置される語」に由来する呼称である。前置詞を意味する語としてドイツ語にはもう一つ“Verhältniswort”「関係をあらわす語」がある。その名が示すとおり前置詞は，基本的には２つの対象物の間に見られる空間的関係を表す働きをする。

さて，前置詞durchの意味をDuden（2003）では次のように記述している。

（空間的に）a）一方の側からあるものの中へ入り，もう一方の側から再び外へ出る動きを表す
b）空間的な広がり全体における[前方への]動きを表す

a），b）ともにdurch は「動き」を表す点で共通する。異なるのはa）が「一方の側から入りもう一方の側へ」という目標を伴う運動であるのに対し，b）はどこへ向かうかの明確な目標がなく単に空間全体を動くということである。このことはNeumann（1987）が指摘するように，durch の意味は，直線的にあるゴールへ向かうというdirection「方向」とそれがないroute「経路」に分けることができるということに対応する。以下に挙げる7aは「方向」を伴う運動を表す文，7dは「経路」を表す文である。

7a, Der Zug fährt durch den Tunnel.
列車がトンネルを通っていく。

7b, * Der Zug ist durch den Tunnel wegen des Unfalls.
7c, Der Zug ist/steht im Tunnel wegen des Unfalls.
列車が事故のためトンネル内に止まっている。
7d, Das Blut fließt durch den ganzen Körper.
血液はからだ中を流れている。
7e, * Das Blut ist durch den ganzen Körper.

「方向」であれ「経路」であれdurchが「動き」を描出する以上，静止状態を表すsein「存在する」やstehen「ある，止まっている」と共起する7bは非文となる。「トンネル」内部に止まっているという「列車」の静止位置を述べる場合は，durchではなくin ＋ 与格が選択される（7c）。「経路」の例文7dは，「血液」が「からだ」を通り抜けるのではなく「体内を流れる」事象を表す。ここには明らかに運動の到達点が認められない。しかし，この場合もseinとの結合は不可能である（7e）。

以上，前置詞durchの意味を概観したが，ここでもう少し仔細に検討してみたい。

前置詞durchを持つ構造は，次のように定式化できるだろう。

・X　durch　Y
8a, der Weg durch den Wald
森を通り抜ける道
・X　自動詞　durch　Y.
8b, Der Zug fährt durch den Tunnel.（=7a）
・動作主　他動詞　X　durch　Y.
8c, Er zieht den Faden durch das Öhr.
彼は糸を針穴に通す。

XとYはともに名詞句であるが，Yはどのような性質を持つのであろうか。

9, Das Geschoss drang durch den rechten Arm.
銃弾が右腕を貫通した。

ここには２つの参与者が存在する。主格主語の「銃弾」とdurch句内の「右腕」である。前者は移動する物体，そして後者は「銃弾」が通り抜けていく物体である。この２つの名詞句は図と地の関係，Lakoff（1993）の用語を借りれば，「銃弾」はtrajector「トラジェクター」（以下，TR），「右腕」はlandmark「ランドマーク」（以下，LM）という関係として捉えることができる。この文は「発射された銃弾が右腕に命中し，そのまま右腕の中を通り，もう一方の側から銃弾が出て行く」

という事態を描写している。つまり，LMである「右腕」は移動するTR「銃弾」の進路上にあって，この移動を阻もうとする障害物であるとみなされる。この時，物体LMには厚さ（幅）に関して制約がない。

10, Die Motten haben sich durch die Kleider gefressen.
衣服に虫が食って穴が開いた。

10では「衣服」がLM，衣服につく「虫」がTRである。つまり，どんな厚さ（幅）の物体であっても，TRの進路上にあってその移動の障害物と認知されればLMはdurch句内部に現れることができる。

また，LMは固体に限らない。TRが移動する進路上に存在し，その行く手をさえぎるものであれば液状の物質であってもよい。

11a, Das Kind schwimmt durch den Fluss.
子供が川を泳いで渡る
11b, Er watet durch einen Bach.
彼は小川を歩いて渡る。

当然のことながら，「子供」は「川」の中を泳がなければいけない。すなわち，通過しようとするLMの内部をTRは通らなければならないという制約がある[1]。このことはLMが平面と認識される状況にもあてはまる。

さて，これまではLMがTRの移動上にある障害物であって，それにもかかわらずTRがLMを突き抜けるという事態であった。ところが，LMにあらかじめTRが通る道が用意されており，この道をTRが通り抜けるという状況でもdurch句が用いられる。

12a, Der Zug fährt durch den Tunnel.（＝7a，8b）
12b, Er zieht den Faden durch das Öhr.（＝8c）
12c, Er rührt Kartoffeln durch ein Sieb.
彼はジャガイモを濾し器で裏ごしする。

各文のTR「列車」，「糸」，「ジャガイモ」は，それぞれ「トンネル」，「針穴」，「濾し器」という障害物に開けられた空間を通過する。その通過距離は「トンネル」のように長いこともあれば「針穴」のように短い場合もある。いずれにせよ，この空間は障害物LMの両端を貫いており，単純に考えればTRの進行を妨げるのもではないように思われる。しかし，穴は実体があってはじめて存在しうるものである。「トンネル」も「針穴」も山や針があることが前提となる。TRが穴に入り内部を進んで再び穴から出るという移動も，あたかも穴がないかのように障害物LMを貫いていると認知されれば，durch句で表現可能である。

では次に，移動する TRを見てみよう。

13a, Das Licht dringt durch die Vorhänge.
光がカーテンを通してもれている。
13b, Ich habe durch das Fernrohr durchgesehen.
私は望遠鏡をのぞいた。
13c, der Weg durch den Wald（＝8a）

固体ではなく光源から放射された「光」であっても，この「光」を遮ろうとするLMを通過すればdurchが用いられる。例文13bは，もちろん「私」の体が「望遠鏡」を貫通するのではない。「私」の視線が「望遠鏡」の内部を通り抜けるという意味である。このような方向を伴う不可視のTRもdurchと共起可能である。また13cのTR「道」は実際には静止状態にあり移動してはいないのであるが，人間の視線イメージすなわち心的走査によって「道」があたかも移動しながら「森」を貫いているように捉えられている。このように前置詞durchは，TRがLMの内部または表面上を一方から他方へと通り抜けるという意味特性を有する。

しかしながら厳密に言えば，LMの一方の端からもう一方の端までのTRの動きがdurchの表す事態であって，TRがLMの中に入る前とLMから出たあとの動きはdurchは示さないと考えられる。

14a, Sie geht durch die Tür.
彼女はドアを通る。
14b, Das Kind schwimmt durch den Fluss.（＝11a）

上掲の例文12b，12cではLMの長さは極端に短い。また14aにおいて「ドア」の開口部を通る時は，通常，開口部に入った瞬間にすでに開口部のもう一方の側から体が抜け出す。この一連の事態を見る限り，durchはTRがLMに入る前もLMを出たあとも含意すると錯覚してしまう。ところが，14bのように「泳ぐ」という行為によって移動できるところは「川」の部分だけである。「川」に入る前と「川」を出たあとは「泳げ」ない。興味深いことに，竹内（1998）は，完全にある空間を横断していなくても対象が空間に対して十分に長いという状況であればdurch が用いられると述べ，次のような例を挙げている。

15, der Stange quer durch das Zimmer　(wurde für Balletübungen angebracht.)

部屋を横断する棒（がバレーの練習用に取り付けられた。）

(99ページ)

実際には，バレー練習用の棒は部屋の大部分を横切っているのであって，端から端まで完全に横断しているとは考えにくいであろう。しかし，「部屋」の壁との距離が短く認識されるくらい棒が十分長い場合は，隣接性に基づいて「横断している」と認知されるためdurchで表現できるのである。

LMの「一方の端からもう一方の端までずっと」という空間的な意味が時間的に用いられると，「ある時間中ずっと」となる。

16a, Ihre Freundschaft hielt durch das ganze Leben.
彼らの友情は生涯を通じて続いた。
16b, Er hat durch 20 Jahre bei ihnen Dienst getan.
彼は20年間ずっと彼らのもとで仕えてきた。

ここでは，ある期間内における状態の継続，行為の持続が表明されており，当然，ある期間の前後は含まれない。

さて他方で，TRがLMの「一方の端からもう一方の端」を目指して移動しない場合でも，durch+名詞句で示されることがある。

17a, Das Kind schwimmt durch den Fluss.（＝11a，14b）
17b, Ein Fisch schwimmt durch das Wasser.
魚は水中を泳ぎ回る。

この２文は同一の動詞schwimmen「泳ぐ」が用いられており，LMも語彙こそ異なるが「水」という意味素性を共通に持つ。しかし，17aは「子供」が「川」を泳ぎきるという目標を持って直線状に横断するのに対し，17bはそのような状況は表さない。「魚」は水の中をあちこち泳ぎ回るものであるということ，「魚」が「水」を直線状に泳ぎきるという意思は持たないであろうということを，我々は当然の常識として知っている。ここでは，明らかに17aとは異なり「もう一方の側へ」という目標がなく，LM内部を「あちらこちら・くまなく」移動する様子が示されている。ただし，TRがLMの外ではなく，あくまでもLM内部のみの動きに限られるという点では両者は一致している。

以上をまとめると，durchにはTRの移動に関して「横断（目標）中心」か「広がり（循環）中心」かという２つの焦点化が認められるといえる。

４．２　副詞durch

分離動詞の分離前綴りdurch- は副詞的用法に起因すると考えられている。ここでは副詞としてのdurchを観察してみよう。Duden（2003）では次のように記述されている。

１，過ぎ去った，その直後に
18a, Es ist schon 3 Uhr durch.
もう３時少し過ぎだ。
２，通過した
18b, Der 8-Uhr-Zug ist schon durch.
８時の列車はもう行ってしまった。
３，済ませた
18c, Mit dem Lehrbuch bin ich jetzt durch.
教科書は今読み終わった。
４，こすって傷めた，走って擦り減った，焼け切れた，引き裂かれた，故障した
18d, Am linken Schuh ist die Sohle durch.
左の靴の底が擦り減った。
５，十分に潰かった，熟成した；十分に焼けた，十分に火が通った
18e, Das Fleisch müsste jetzt durch sein.
その肉はもう火が通っているはずなんだけど。

上の例文はすべて，動詞seinとともに用いられている。durchの前置詞用法では，後続の名詞句がTRの移動を阻もうとする障害物LMを表していた。それでは，副詞用法ではTR及びLMはどのように実現するのか。

非人称主語を持つ時間表現の18aを除くと，durch + sein構文は２つのタイプに分類できるように思われる。一つは，主格主語が移動体つまりTRで，この移動体が言語化されてはいないが文脈から推測可能な障害物（ゼロLM）を通り抜けていくタイプである（18b，18c）。もう一つは，主格主語が前置詞durchの対格目的語であると解釈することができる，つまり主格主語が障害物LMであるというタイプである（18d，18e）。18bの主格主語「列車」はどこを通り過ぎたのかという情報は述べられていない。 18cではTRと解される「私」の通過する場所がmit句で表現されており，その句内の「本」がLMと解釈される。これに対し，18dでは主格主語「靴底」がLMを表している。歩いたり走ったりした時に生じる摩擦で「靴底」が磨耗し，その結果として「靴底」に「穴があいている」事態がこの文で描写されている。ここではTRは言語化されていないが，歩く行為・走る行為が「靴底」の状態を変化させたと推測できる。18eの主格主語「肉」もLMである。18dでは「穴があいている」のは「靴底」の一部分であって，常識的あるいは現実的に「靴底」一面に「穴があいてい

る」とは考えにくい。しかしながら18eは，「肉」全体に「十分に火を通す」という事態を表しており，TRがLM全体に作用しているという点で18dとは異なる。18dにおいても摩擦は当然「靴底」全体に生じるわけであるが，その結果durchの状態になるのはその一部分だけである。

副詞durchを持つ文は主格主語がTRかLMかの違いは確かに認められるが，上の例文すべてに共通しているのは，副詞durchが当該の出来事が生じた結果状態を表すということである。これが副詞durchにとって重要な意味特性の一つであり，以下で分析する接頭辞durch- の分離という特性に関与していると思われる。

5．分離前綴りと非分離前綴りの意味

分離・非分離前綴りdurch- は不変化詞durchが有する意味と深い関係があるとされている。ここでは，副詞が分離前綴り，前置詞が非分離前綴りに由来するという一般化の妥当性を考察する。前綴りdurch- の分離・非分離の違いはどこにあるのだろうか。基礎動詞fahrenと分離・非分離の用法を併せ持つdurchfahrenで検証する。

19a, Er fährt durch den Park.
　彼は公園を通っていく。
19b, Er fährt durch.
　彼は（乗り物で）通過する。
19c, Er durchfährt den Park.
　彼は公園を通っていく。

19aはdurch句を伴った単一動詞文である。19bの分離動詞文は，文脈上TRが通り過ぎるLMが補完できることを前提としている。19cは対格目的語den Park「公園」をとる非分離動詞文である。これらの文はすべて主格主語TRがLM（19a，19cではden Park「公園」，19bではゼロLM）の中を移動するという点で共通している。しかしながらWunderlich（1983）が指摘するように，これらの文にTRの移動の目的地を表す成分を加えると相違が顕在化する。

20a, Er fährt durch den Park zum Bahnhof.
　彼は公園を通って駅まで行く。
(Wunderlich, 460ページ)
20b, Er fährt zum Bahnhof durch.
　彼は駅まで走り続ける。
(同上, 461ページ)

20c, *Er durchfährt den Park zum Bahnhof.
(同上, 460ページ)

20aと20bでは，zum Bahnhof「駅へ」という随意の副詞規定語を付加して，TRが目指すゴールを表現することができる。これに対して，20cの非分離動詞文は移動の目的地を明示する副詞規定語と共起できない。20cは，仮にzum Bahnhof「駅へ」がden Park「公園」を修飾する構造，すなわち「駅に通じている公園」という一つの名詞句を形成しているのであれば適格である。しかしながら「公園を通り抜けて駅まで行く」という意味では非文となる。TRである「彼」の行為は「公園の中を移動する」ことだけであり，目的地は含意されない。単に「公園」というLMの空間内部における動きだけに焦点をあてた表現である。この非分離前綴りdurch- は，ちょうど例文17bにおける前置詞durchの意味に合致する。

ところで，前置詞durchが持つ2つの意味，「端から端まで」と「空間全体における運動」はどのように関係づけられるのだろうか。仮に，LMと同じ幅のTRがLM内部を「端からもう一方の端まで」移動したとする。このときTRが接触しながらたどった部分はLMの「一面に渡る」ことになる。「空間全体における運動」はこのように，「端から端まで」という意味と緊密な関係にあると考えられる。つまり前置詞durchで表明される事態は，LM内部のみで行われるTRの横断運動及び全面運動である。全面運動が焦点化されTRが横断を目的としない典型的な事象は，人間のからだの中で生じる心理現象だろう。この場合も，接頭辞durch- は非分離である。

21a, Ein fremdartiges Gefühl durchzog ihn.
　奇妙な感情が彼の心に広がってきた。
21b, Er ist von Begeisterung durchglüht.
　彼の心は感激で満たされている。
21c, Grauen durchrieselte ihn.
　彼は恐怖のあまりぞっとした。
21d, Angst durchkriecht mich.
　不安が私の心をよぎる。
21e, Ein Schauer durchflutete mich.
　私はぞっと身震いした。
21f, *Ein Schauer flutete mich durch.

これらは，対格表示された人間の体全体に「恐怖・不安・戦慄」が流れ，「奇妙な感情・感激」が心に広がるという意味である。21fのように，この事態は分離動詞を用いると非文になる。また，LM内部全体にTRである「音・光」などが広がる状況も非分離前綴りdurch- は表す（22a，22c，

22e)。ここでもLMの横断は焦点化されていない。ちなみに，LM全体がTRに満たされるのではなく，TRがLMを通り抜けることを描写するのは分離動詞である（22b，22d，22f)。

22a, Begeisterung durchbrauste den Saal.
　ホールが熱狂で満たされた。
22b, Der Zug brauste［durch den kleinen Ort］durch.
　電車が轟音をたてながら［小さな村を］通り過ぎて行った。
22c, Immer hatte Musik das Haus durchklungen.
　いつも音楽がその家中に響き渡っていた。
22d, Durch seine Worte klang Unsicherheit durch.
　彼のことばから自信のなさが感じられた。
22e, Die Sonne durchschien das Zimmer.
　太陽の光が部屋全体をくまなく照らした。
22f, Die Sonne schien［durch die Wolken］durch.
　太陽の光が［雲を通して］もれていた。

22b，22d，22fの分離動詞文では，TRがLMを突き抜けて外へ飛び出していることが理解できよう。

身体の内部に生じる様々な心理現象は，それ自体，経験者自ら制御不可能であり，そのまま受け入れることしかできない性質のものである。経験者はこのような自然に湧き上がる自分の感情・感覚を意のままに操ることはできない。自分の意思ではどうすることもできない出来事を表し，かつ移動を含意しない基礎動詞には非分離のdurch- だけが現れる。他方，基礎動詞にコントロール可能な行為の意思性が認められる場合は，非分離と分離のdurch-が並存する。

23a, eine angstvoll durchbebte Nacht
　不安に震えながら過ごした夜
23b, *Er hat eine Nacht durchgebebt.
23c, Er hat viel durchlitten.
　彼はいろいろ苦労してきた。
23d, *Er hat viel durchgelitten.
23e, eine durchfeierte Nacht
　パーティーで過ごした一夜
23f, Er hat manche Nacht durchfeiert.
　彼は幾晩もパーティーをして過ごした。

23g, Wir haben［die ganze Nacht］durchgefeiert.
　私たちは［一晩中］パーティーをした。

beben「震える」という生理的事象は自分の力で抑えることはできない。また，leiden「苦しむ」ことを自分から欲することはないであろう。これらの基礎動詞には分離接頭辞durch- は付かない(23b，23d)。これに対し，意思性を伴う行為feiern「パーティーをする」は，主格主語がやめようと思えばいつでもやめられる行為，続けようと思えばいつまでも続けられる行為である。非分離動詞では「パーティーをする」期間が対格目的語ではっきりと示され，主語つまりTRが期間というLMを初めから終わりまで進み，その期間を過ぎることはない。非分離動詞には対格目的語が必須であり，これが「他動的行為の対象」（黒田1998）または焦点となっている。期間が明確である，あるいは期間に重点が置かれているということは，23eのように，非分離動詞の過去分詞形が付加した名詞句で表現されることからもわかる。同じ「パーティーで過ごす」でも分離動詞durchfeiernのdurch- は非分離動詞durch- とは意味が異なる。上述のように分離動詞にはゼロLMがあり，TRはそこを通過してさらに目的地まで進むことができることを確認した（20b)。しかしながら，目的地の言語化は必須ではない（19b)。このことは，TRの意志如何で移動や行為を取りやめることも継続することもできるということを意味する。分離前綴りdurch- はTRの意志性を含意するため，コントロール不可能な事態を表現する動詞とは意味上相容れないと考えられる。

さて，分離動詞の中にはTRがLM内部を移動することにより，結果としてLMが以前とは異なる状態に至ることを表出するものがある。

24, Ich habe die Wand grün gestrichen.
　私は壁を緑色に塗った。

24は動詞streichen「塗料を塗る」という行為の結果，「壁が緑色になる」事態を表している。つまり，この文は状態変化が引き起こされることを表す結果構文である。grün「緑色」のように結果を示す語句を結果述語というが，この構文で特徴的なことは，結果述語が意味的にかかるのは対格目的語であるということである。下の文も同様に結果構文である。

25a, Er reitete das Pferd müde.
　彼は馬にのって走り疲れさせた。
25b, Ich habe mir die Füβe wund gelaufen.
　私は走りすぎて足を傷めた。

「馬を乗り回した結果，馬が疲れる」，「走りすぎた結果，足を傷める」のように，行為以前の状

態が行為によって「疲れた」状態，「傷めた」状態に変化している。実はこの結果構文と同様の構文が分離動詞にも認められる。しかし，非分離として振る舞うと非文となる（26b，26d）。

26a, Er reitete sich die Hose durch.
　　彼は馬に乗ってズボンが擦り切れた。
26b, *Er durchreitete die Hose.
26c, Ich habe die Schuhe durchgelaufen.
　　私は走りすぎて靴が擦り減ってしまった。
26d, *Ich habe die Schuhe durchlaufen.

この場合，分離前綴りdurch- が24，25a，25bのように結果述語として機能している。「馬に乗る」，「走る」という行為の主体がTR，対格目的語「ズボン」，「靴」がLMであり，損傷のない状態だったLMが当該の事象によりdurch「擦り切れた」，「穴の開いた」状態変化を被る。事象の前後で対象物の状態が変化し，durch「擦り切れた」，「穴の開いた」という結果に至ることを分離動詞が表すことができるということは，まさに分離前綴りdurch- が横断を含意するからであるということから説明できよう。これに対して，非分離durch-ではTRがLM内部を移動することだけが焦点化され横断は含意しないので，非分離動詞は結果構文を持つことができないと考えられる。

6．おわりに

動詞接頭辞durch- をもつ分離動詞・非分離動詞を，前置詞としてのdurchと副詞としてのdurchの意味機能という観点から分析した。その結果，以下の事実を確認することができた。

1．前置詞durchはTRの移動に関して「横断中心」と「広がり中心」の二つの意味を持つ。「横断中心」では，TRがLMを出たあとの目指すゴールは任意である。「広がり中心」ではTRがLMを出ることはなくしたがって目指すゴールもない。
2．「横断中心」のdurchは分離動詞の分離前綴りに継承されている。「広がり中心」のdurchは非分離動詞の非分離前綴りに継承されている。
3．副詞durch は出来事が生じた結果状態を表し，分離動詞の分離前綴りに継承されている。そして「横断中心」の前置詞durchに対応する意味機能を有する。

何らかの意味論的な要因が動詞接頭辞durch-の分離・非分離の決定を左右すると考えられるが，本稿では十分に行うことができなかった基礎動詞の意味構造分析によって，分離・非分離現象を明らかにすることが今後の課題である。

註

(1)「川を泳いで渡る」は，前置詞überでも表現可能である。
　a, Das Kind schwimmt durch den Fluss.
　b, Das Kind schwimmt über den Fluss.
　しかしüber+対格は対象物の「上面を離れて向こう側へ」という意味である。「泳ぐ」行為は水中で行われるので，厳密に言えばaの方が適切であろう。durch では行為によってLMの内部を「横断すること」に，überではLMを「越えること」に重点が置かれていると考えられる。

参考文献

Curme, G.O. 1952. *A Grammar of the German Language* Frederick Ungar Publishing Co. New York.
Duden. 2003. *Deutsches Universalwörterbuch* Dudenverlag.
Grimm, J./Grimm, W. 1984. *Deutsches Wörterbuch.* Band 2. Deutscher Taschenbuch Verlag.
橋本文夫 1961.「前つづりdurchとumの分離・非分離について」『中央大學文學部紀要』24-41.
橋本文夫 1975.『詳解ドイツ大文法』　三修社
Helbig, G./Buscha, J. 2001.『現代ドイツ文法』　在間進訳　三修社
影山太郎編 2001.『日英対照　動詞の意味と構文』　大修館書店
国松孝二他編輯 1990.『独和大辞典』　小学館
黒田廉 1998.「分離・非分離前つづりに関する一考察」『日本獣医畜産大学研究報告』第47号　57-63.
Lakoff, G. 1993.『認知意味論』　池上嘉彦・河上誓作他訳　紀伊國屋書店
中條宗助編著 1982.『ドイツ語類語辞典』　三修社
Neumann, D. 1987. *Objects and Spaces.* Gunter Narr Tubingen.
竹内義晴 1998.「移動の運動感覚を取り込んだ認知意味論―ドイツ語の前置詞durch の分析―」　『金沢大学文学部論集　言語・文学篇』　第十八号　87-108.
Wunderlich, D. 1983. On the Compositionality of German Prefix Verbs. In: *Meaning, use, and interpretation of language* (eds.) edited by Rainer Bäuerle, Christoph Schwarze, Arnim von Stechow. W. de Gruyter, 452-465.